

〔本朝食鑑^一〕燈火 附燈花燭火保久知火

集解^{○中} 燭者蠟燭也本邦蠟燭用漆樹皮而造之又有蟲蠟樹皮之造此伊保多蠟也俱無毒但雖燈草無害然蠟心有油者不好用焉

〔本朝世事談綺器^二用〕蠟燭

文祿年中までは日本に蠟燭なし助左衛門が獻するらうそくに倣てこれを製す蠟を採もの凡五種あり漆樹荏桐榛ダマノ木烏白木また女貞木よりも取ると本草にあり雍州府志に云黃白の蜜壺の底に凝滯ものを取て蠟とす

唐らうそくは眞に霞を用るよつて折として立消のあるもの也本朝の人これを考へ燈心を巻て眞とすはなはだ上品なり

〔嬉遊笑覽^{十下}〕蠟燭鄭玄儀禮注云古燭未知用蠟直以薪蒸卽是燒柴取明耳亦或剝樺皮蒸之亦已精矣然曲禮曰燭不見跋則是必有質可窆乃始有跋耳曲禮或是有蠟燭後從其所見而言之耶^{跋と禮}記上客起燭不見跋^{跋註跋燭本聚殘}也^{本客見之知夜深淺而慮主人倦也}こにはもと舶來したるを用ひしなるべし義堂日工集一蠟燭十條など出たるも異國より渡りしならむ^{○中}

續五元集に上蠟かけは蜀黍の眞といふ句あり今もろこし穀の心を用ゆるはわろき蠟燭なり奥州にてせつかんらうそくと云は蜀黍を心にしたる松脂の蠟燭なり燃て眞たつ時頭を敲く故の名なり

〔人倫訓蒙圖彙^六〕蠟燭掛 らうそくをつくるをかくるといふ蠟は會津を第一とす其外所々より出るかけてをやとひてこれを造る下に牛らうをかけうへに本らうをかけてするなり

〔武江年表^八〕天保八年丁酉 八月薩摩蠟燭售ひ始む魚蠟と號す

〔經濟要錄^五〕脂膏第十一

蠟燭種類